

資料

周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇 (2)

小川利康編

承前

前号に引き続き、本号では一九三七年より四〇年までの書信を掲載する。

表記・体裁については前号の方針を踏襲したが、読みやすさを考慮し、原文にない記号（鉤括弧などのいわゆる約物）を書き加え、さらに日中間で異なる記号も可能な限り統一するよう改めた。前号分についても、近い時期に同じ方針に沿った改訂版をPDFで公開したいと考えている。

今回も飯倉照平先生（東京都立大学名誉教授）に校閲を仰いだ。ここに記して謝意を表したい。

戦前篇（合計周四十二通／松枝二十三通）

・一九三六年（周四通／松枝五通）

「文化論集」三〇号

・一九三七年（周三通／松枝一通）

・一九三八年（周五通）

・一九三九年（周五通）

・一九四〇年（周十二通／松枝七通）

本号

・一九四二年（周三通／松枝三通）

・一九四三年（周八通／松枝三通）

・一九四四年（周二通／松枝三通）

次号

一九三七年

19371105M【松枝茂夫↓周作人】⁽¹⁾

周作人先生…

久しく御無沙汰いたしました。お変わりございませんか。御伺ひ申し上げます。この度はいろ／＼と御心痛の事とはるかに御察し申し上げて居ります。

さて小生事數年前より先生の隨筆集翻譯を心がけ、七八百枚の譯稿を作り上げましたが、不審の個所が甚だ多くて自信がないのと、差當つて出版書肆も見つからぬためさしおいて居りました。そのうち偶然尤炳圻先生⁽³⁾を知り、教へを乞へることを喜んだのも束の間、やがて事件の勃発と共に御歸國になり、非常に落膽いたしました。しかも時局は刻々にはかつて、もうこの原稿は世に出せる日はないのではなからうかと半ば諦らめて居ましたところ、最近改造社からは非出版したい由、申して参りました。しかし時節柄、そのために先生に御迷惑がかかるやうな事があつてはと一應躊躇しましたが、時局に関係のない「閑適」文章ならば別段差支へなからうかと思ひ返して、舊稿に手を加へ始めました。そして別紙目録の如き(約五百枚)六十餘篇を選びました。なほこの中、「三札讚」を今月號の『文藝』⁽⁴⁾に寄せましたら、編輯者は「娼婦札讚」を省いて「二つの札讚」にしてしまひました。蓋し検閲(風俗壞亂?!)を恐れた爲めです。こんどはなるべく採りたいと思ひますけれども、都合でどうなるかわかりません。兎に角、先生に御迷惑をかけない様に充分氣をつけるつもりでございます。

つきましては、誠に勝手なおねがひで重々恐縮いたしますが、左の條々をどうか至急お教示下さいませんでせうか。

一、懷東京

イ、堀田大學の詩の出所、原文

ロ、「瘞旅文」

二、論泄氣

「白面」ハ ヘロインでせうか。

「箕子」とは朝鮮人を指すのでせうか。

天靈蓋、紫河車

三、窮袴

「不可録」の文藝政策

四、金魚

泥鱮龍船

五、虱

イ、「西洋也有臭蟲」語源

ロ、文貞腰捫一虱、以齒斃之、血濺齒上。張云、大率類此。

六、兩株樹

イ、郷間冬天賣野味有柏子烏（讀如呆鳥字）

ロ、唐式？（『三才圖會』案語）

七、水裏的東西

イ、「翻九樓」

ロ、「頓銅錢」

八、偉大的捕風

螺舟

九、抱犢谷通信

孫美瑤は孫伝芳の事でせうか。臨城で？

一〇、死法

「什麼世界、還講愛國？……」この意味？

一一、雨天之書序二

錢店官

一二、喫茶

顯清貧寡欲，終日長疏食。(「長」ノ意)

至重宰割而惜生命，又其念茲在茲，而不忍或忘者矣。(「閑情偶寄」)

一三、夏夜夢

イ、「太人」

ロ、子史輯要

ハ、桐選合璧

一四、關於魯迅

イ、如傳聞鄉試對門時所祝，正是「有恩報恩有怨報怨」的時候

ロ、清道房同派下羣從譜名為壽某

其二、

イ、黑太子南征錄

ロ、仙女緣

ハ、白雪塔

原著者 書名

二、鬻俄的偵探談似的短篇小説、叫作什麼尤皮的、

(尤皮とは外國語の譯書でせうか?)

なほ、「著譯書目」の誤をお教え下さい。(所載『中国文学月報』⁽⁵⁾別段切抜きをお送り申し上げますから。) ことに「炭画」の出版年月を知りたいと存じます。

甚だ面倒なお願いひで恐れ入ります。お願いいたします。

東京市本郷区元町一丁目十六番地依田方

松枝茂夫拜

19371122Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓 手書誦悉，拙文承尊譯刊行，甚感且愧，蒙下問各事，別紙寫上乞賜察覽。「西山小品」，最初係用日本語所寫，曾登在東京出版之『生長する星の群』第一卷九號中。雖然拙劣，但有此一段因緣，如能查出收在卷末，亦是大幸事也。「炭畫」出版年代抄呈，又有譯書多種，亦附入。自審譯著均無成就，唯此希臘譯本似較爲真實耳。⁽⁶⁾鄙人在東京留學數年懶不用功，至今只記得一點希臘語，今冬無事正在整理神話譯文，希望明春可以畢事。深喜得了此心願勝於他事多多矣。匆匆此上。

松枝先生台鑒

周作人啓

十一月二十二日

一，懷東京 「瘞旅文」

王陽明所作文，讀官廳場丞，道中見死人，與僕共葬之，故文中云，吾與爾猶彼也。

白面

應作白麵_シ，即_シ白粉，北京人省麵為_シ面。

箕子後人_シ朝鮮人

二，論泄氣

天靈蓋_シ頭蓋骨。紫河車_シ胞_シ，均漢方醫之藥名。

三，窮袴

『不可錄』係書名。戒淫之低級勸善書。

四，金魚

泥鯁龍船，紹興水鄉祭日娛神之物，小舟寬約二尺長可十倍，坐數十人操槳如飛，其形細長，故俗名如此。前後有龍頭龍尾。

五，蝨

大率類此_シ大蝨累齒（同音），累齒之意略同「齒を汚す」。

西洋也有臭蟲，清朝時代國粹家之語，其姓名不詳。

六，兩株樹

柏子鳥誤寫，鳥讀為_シtau，不作_シtau音。呆鳥見『水滸傳』。

李達口中常有之，亦常讀作_シtau。此處原係俚語，但柏子鳥讀_シtau乃是方言，意仍云下り也。

『三才圖會』中_シ唐式，未詳，或是書名？

七，水裡的東西

翻九樓，儀式之名，即為文中所說道士從高臺上跳下，雖原是宗教儀式而近於演技矣。

頓銅錢，小兒遊戲名，地上畫格幣如，置錢有孔其中，一人以錢投之，出格者為負，其方法與規則

甚繁。

八，偉大的捕風

螺舟，請見馬叙倫氏筆記中。筆記曾十餘年前新聞上，今無可考，不能詳其說矣。

九，抱犢谷通信

孫美瑤，土匪頭目，曾在山東臨城搶劫列車，拉致中外人質藏抱犢谷中，後受政府招撫為團長，終

被銃殺。

十，死法_シ什麼世界還講愛國，意云此是什麼世界，還要講愛國麼。

十一，雨天之書序 錢店官，方言店官。番頭，此言錢店の番頭，所謂錢店與銀行不同，却又非兩替店。
十二，喫菜 長蔬食。此長字即長久。始終之意。

念茲在茲，成句，見『書經·大禹謨』，此處只說是念念不忘之意耳。

十三，夏夜夢 太人，古代占夢之官。見『詩經』。

『子史輯要』，類書之名，抄錄子史兩部，分之故典，分類排列本。

桐選合璧，桐城派古文與文選派駢文混合而成之文，故戲為此稱。

十四，關於魯迅 鄉試秀才在本省受時，相傳在試場幽靈皆來報恩或報怨，受試者或得幽靈之助而及第，或被迫害而

死。『果報錄』（低級勸善書）中多記之，傳說試場將封門時試官祝禱意云，有恩者可來報恩云云，

實在（祝禱）則無此事。

清道房云云 清道房同派下清道橋紹興地名，從清道橋周氏分出來的一支派下 羣從イトコ 從兄弟等之。

譜名周氏宗譜(1) 系圖上之名 爲壽某兩字之中，上二字皆爲壽。例如周壽松，周壽柏，而魯迅則不然，名爲權壽，壽字在下也。

囂俄著偵探談，尤皮，日本譯作ユーベル，原文未詳⁽⁷⁾

又『黑太子 (Black Prince) 南征錄』哈葛得 (H. Howard) 著，原書名已忘。 『仙女緣』等原書未說明，不可考。

炭畫 一九一四年 文明書局初板

一九二六年 北新書局再板（今已絕板）

希臘擬曲 一九三四年 商務印書館出版 中華教育文化基金會 會編譯委員會編譯

ヘロダス作六篇 テオクリトス作五篇

希臘神話 近刊（同上） （同上）

アポロドロス 原著

秉燭談

近刊

北新書局

近作四十四篇

桑下談

又

開明書店

關於紹興的文章三十篇

19371207Z 【周作人↓松枝茂夫】

啓者，前寄一函，想蒙察覽。『黑太子南征錄』著者，前信說是哈葛得，恐有誤，似實係司各得 (Walter Scott) 也，唯手邊無此書，亦不能詳耳。見『中國文學月報』中爲文，以日本學研究者見稱，甚爲惶恐，名實殊未相合，不特冒瀆此名稱也。六月中曾爲『國聞周報』寫一小文，說明了解日本精神之難，截至今日只能自白曰不懂，蓋吾人平日所稱爲日本文化而加以贊歎解說者實在只是東亞共有文化之一色相，因此吾儕漢人亦覺得能了解，此種研究可以爲治國故（支那學）者之助，卻與了解日本民族完全無用，鄙人以前所知之百一即屬此方面，近日知其無益，故不願再以此自欺欺人也。鄙意欲知日本國民精神須從神道下手，此處不敢牽涉祭政一致等大道理，乃只是就お祭り爲主的民間信仰說，鄙人直覺的感到日華兩族最殊異者乃在宗教的情緒，如神憑。這種事實在漢族今已幾乎全無矣。但鄙人自信是出於儒家的人，對於宗教完全隔膜，祭り等事雖有興味，實覺無入門研究之希望耳。數年前曾將文學店關門，今於蘆溝橋事件之前又將日本研究店閉歇，可謂得時，此後談東方文化者將如雨後之菌矣。以後作何事尚無計較，此一年乃在翻譯，將希臘人自著神話翻成漢文，本是多年宿望，於今得達亦是大大好事也。妄談希勿見笑，此上

松枝先生座右

周作人啓

廿六年

十二月七日

19371213Z【周作人↓松枝茂夫】

啓者。前寄一信，想已蒙察覽。偶閱尊譯『北京の果子』，見第一篇中有「秋の川を見る」句，案此秋河實即是天河あまのがは之別名，校正時請改寫爲幸。昨遇竹内君得知松井君不幸在大連物故，殊出意外，想同爲悼歎也。匆匆不盡，此上。

松枝先生座右 作人啓

十二月十三日

一九三八年

19380711Z【周作人↓松枝茂夫】

拜啓，惠函拜誦，遲答爲歉。隨筆集十冊已承改造社寄下，因了大手筆的譯文，田中君之裝禎，甚增光彩，唯原本文意均乏，思之愧汗耳。鄙人讀書作文甚受日本二先輩之影響，即內田魯庵、戶川秋骨是也，今戶川先生處既已寄贈，甚爲快慰，永井佐藤二君如本來亦欲呈教者也。此外未曾領教之各先生擬且不唐突，唯武者小路、志賀二君處想各送一冊，乞一詢改造社，如社中對於二君未有贈呈，則祈能請其一送，不勝幸甚。

田中乾郎君(10)來北京已得一見，快談逾晷，甚有其尊父之風，大有風趣，知其將居留二年，談天之機會甚多，亦一快也。尤君往東京之事(11)，歷時半載至今未有確信，深恐其又不成功，鄙人曾稍有參與，故亦頗關心，但無能爲力，想尤

君亦不見怪耳。改造社山本社長來此間，曾得會見兩三次，惜在此際實在無甚可說，深辜負其熱誠耳。鄙人近一年中譯述希臘神話，大部分已成，現尚餘注釋，大約佔全部四分之一，當有十萬字，如能於十月中畢事，則此一年爲不虛度矣。

匆匆奉復，不能盡言。此上

松枝先生大鑒

七月十一日 周作人啓

再，關於沈從文，前『改造』中山本君曾說鄙人云沈像苗族，⁽¹²⁾此有錯誤，尊譯『邊城』中如說及著者，乞弗沿用爲幸。鄙意只云沈君生於鎮筸，其地苗人甚多，風俗殊異，若關於沈君氏族之傳說，則未能斷言也。沈君有「從文自傳」，想已覽及，不但文筆甚佳，其敘幼時情事可以見沈君生活之一斑，亦有用也。作人又及，十一日

19380827Z 【周作人↓尤炳圻↓松枝茂夫】⁽¹³⁾

平白兄：

昨日別后又想起松枝君譯稿中，梁任公「論小說與群治之關係」末一章^{大約在}處，將群治註作デモクラシ，似不妥，其時尚無此語，所謂群治實只是社會或社會生活之意耳。如校稿尚未交出，請爲改正。專此奉閱，順頌

大安 作人啓

廿七日

19380831Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。前寄一函，想已蒙察覽。日前尤炳圻君自東京返北平賚到，惠賜各品謹已拜受，謝謝。在此時期尚得享受東京風味，念之惘惘，以此尊惠，益不可忘矣。專此致謝，匆匆不盡，此上。

松枝先生

八月三十一日 周作人啓

19381126Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。蒙惠賜尊譯『邊城』，頃已領收，謝謝。沈君作品承紹介於日本文壇至爲可喜，唯原作者現在雲南省城，惜未能知之耳。今日晤田中君¹⁴，知尊譯『中國新文學之源流』將由文求堂出版，此是甚大光榮，卻亦甚慙愧，深恐此隨筆更出醜矣。草草順頌

松枝先生近安 作人啓

十一月廿六日

19381223Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。得十一日手書，誦悉一一。『新文學之源流』本係臨時信口所說，殊無足取，乃蒙譯出付印，甚爲惶恐。其中關於桐城派及八股文兩部分尙缺細考，故所言極慮淺，爲欲善論，須再用兩年調查工夫。此節曾與筆記者鄧君說過，若作爲鄧君所記則無妨出版，此次尊譯如題爲鄙人所著，仍感不安，乞說明此爲講演記錄爲荷。唯如此淺說而呈獻於

貴國學界之前總是極惶恐事也。此外拙文又蒙選譯，且感且愧，承示目錄極佳，此蓋謂選擇之眼光甚正，至於各文之少內容則又是別一事耳。北平近日大雪，嚴寒將至，鄙人今秋後在燕京大學任課四小時，每週須出城一次，未免受影響，蓋閑癩已久，再上講壇，頗以為苦也。不盡此上

松枝先生 作人啓

十二月廿三日

一九三九年

19390106Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。前寄一函，想已蒙察覽矣。日前在舊苦雨齋 今暫充應接室之用 門

外照一相，並不甚佳，但可以知鄙人近狀耳，今附呈一枚乞賜察

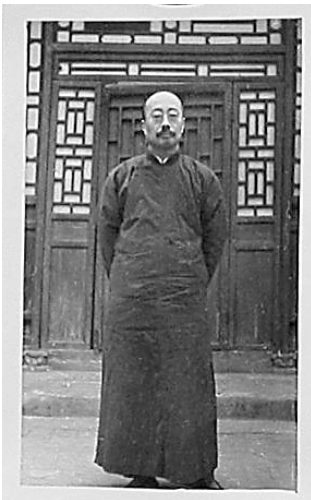
收為幸。匆匆不備，上

松枝先生大鑒

廿八年一月六日 周作人白

(写真の裏書き)

中華民國廿八年一月三日



在北平所照奉贈

松枝先生 作人

19390304Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。手示誦悉，拙文屢承選擇，甚感且慙。回想舊作無一滿意者，今如作為教材，更益恐縮矣。承詢各節別紙寫呈⁽¹⁶⁾乞賜查收爲幸。知下月將往福岡，甚々善々，鄙人昔年亦曾有覓暇往九州暫住之意，只是惣無機會，今則更不可能矣。匆匆奉復，不盡，上

松枝先生 作人白

三月四日

19390308Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。前日寄一信，其中所說自己落實，曰悶雷一條，似有欠確實處。⁽¹⁸⁾頃閱『三俠五義』，見八十二回中敘艾虎得免刑，云此時慢說艾虎心內落實，就是四義士等無不替艾虎僥倖的。可知此語當作安心、落着ク解，自己落實當是獨りで落ちついて居る意解乎？『三俠五義』似係北京人所述，『鄉言解頤』作者李光庭亦是京兆寶坻縣人，當是北方方言也。此上

松枝先生左右 作人啓 八日晨

19390605Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。手書誦悉。承下問各節今別紙寫呈乞察收。尊譯拙文及隨筆抄知已出版，因久未與田中君相遇故未得見，昨日已得讀到。尊譯極佳，唯內容生疏，愧不相稱耳。匆匆奉復，不盡，此上

松枝先生左右

六月五日 周作人

一、顏氏家訓 〇王子侯，查『梁書』·武帝弟五人，其中無此人。此語難解，大抵侯即是侯爵乎，但帝弟均封郡王或王，且此處其上又加王子，亦嫌重復。盧文弨注本中無注，蓋亦未能詳也。

二、關於傅青主 〇氈裘氣，猶云荒儉氣。

三、文章的放蕩 〇讀了別字，讀みちがひ，因爲亡國之音本云己亡之國其音如此，而一般的解爲將使國亡，故〇〇字讀錯了也。許思曼 = Huysmans

附、管輪班 〇機關科

四、莧菜梗 〇人事 舊訓作饋贈物，此處恐亦作如此解。郡齋即郡署，非書齋。如人長 〇人のたけの如し。

五、興天憫人 〇血影石，舊傳方孝孺爲明永樂帝所殺，血跡留石上，永遠不滅。石在南京明故宮中。在南京爲學士時曾一見，石有微紅處，蓋是 〇弼教坊，在杭州，清乾隆時文字獄之一——莊氏明史之獄，殺文人以至刻字匠三百餘人，即在此處。

六、花鏡 『眼學偶學』，『讀碑小箋』，二者均是羅振玉所作筆記，大抵關於考訂文字史事考。木刻印本。

七、笑話選序 此二則均是猥褻的笑話，如能找到日本印本『笑府』（選本一冊）一查最好。

八、再談油炸鬼 邱濬原文未見，趙翼『廿二史劄記』卷廿六，「和議」一篇下注云：「明邱濬曾有南渡后不得不和之論，爲世儒所訛笑。今此論乃噓其燼乎，然通觀古今者必見及此也。」李贄〔藏書〕、汪士鐸〔初學堂〕等〔新刊〕、汪士鐸〔丙目記〕所說不關秦檜，此只指二人論古的特識耳。汪氏清末人，甚反對道學及孟子之王道。

19390717Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。前寄一函，想已察覽。頃見錢大昕著『恒言錄』卷一「人事」條下註云禮物也，所引書中有『後漢書』賈逵傳，亦有「無人事」語，然則似仍當作贈遺解乎。又郎瑛著『七修續稿』卷三記邱文莊，濬語云秦檜再造南宋岳飛不能恢復，蓋可以知道邱濬所說大意。姑以奉閱，草草不備，此上

松枝先生左右 周作人啓

七月十七日

一九四〇年

19400101M 【松枝茂夫↓周作人】

新年の御祝詞申し上げます。

あれから早くも一年たち、今更感慨にたへません。いつもいつも御無沙汰に打過ぎ、申しわけなく存じますが、ますます御元氣にお過しの事と拝察いたします。富山房から出る筈の『文藝隨筆抄』はずでに七月末に校了にして出

るばかりになったのが、本屋の都合で、いまだに出ず、先生に対してもまことに面目がございませぬ。なんでも電力統制による紙饑饉のためださうです。本屋との間に立つてゐる友人に気の毒で怒る事もありません。それでも正月勿々には出るだらうと申してをります。それもアテにはなりませんけれど、いづれその中には出ようかと思ひます。さて又、大阪の創元社から、先生の随筆集を譯して欲しいとの依頼を受け、早速承諾し、舊臘から少しづつ、譯しはじめました。多分創元選書の一だと思ひます。柳田先生の『木綿以前の事』のやうな本と同じ叢書に入るのには意味があるやうに感じたからで御座います。

改造出版の随筆集は今見ても冷汗三斗、殆ど毎行に誤譯を見出します。その中の殊に甚だしい部分だけでも改譯してこれに宛てようかとも考へましたが、近いうちにその機會は必ず又あるに違ひないと思ひ返して、やはり未譯の部分で譯する事にいたしました。

又たとへば『風雨談』ならそれ一冊をそっくり譯すといふ方法があり、これも大へん面白いと思ひますが、それも次の機會に譲らうと思ひます（『風雨談』は是非譯したいと思ひます）。結局、前二書のやうに、割合譯すのに樂なものを選ぶことにいたしました。

山中雜信、勝業、我等の敵、二つの鬼、おもちゃ、燕知草跋、妖術について、中年、冰雪小品文選序、棗と橋の序、莫須有先生傳序、五雜俎、苦茶について、運命について、割股について、考試について、王韜について、劉青園の常談、牡牧の句、情書の書き方、活埋について、廣東新語、模糊、老年、鈍吟雜錄、策論を談る、日本雜事詩、雅片事略、戒律を読む、舊日記抄、常談叢錄、結縁豆、養鳥を談る、勸酒を談る、最後の十七日。

大体このへんと考へてゐますが、いかがでせうか。

ついではこの随筆集の書名を何としたものか、甚だ恐縮では御座いますけれども御命名下されませんか。

たとへば『看雲集』とか、さういふ名前の方が面白いと存じます。

『隨筆集』抄』とばかりではあまり曲がないので、何か適当な書名を付けていたゞければ有り難いと存じます。いかゞでございませうか。

富山房から出る筈でまだ出ない本のあちらこちらまづい處がもう氣にかゝつて困つてをります。いくら念を入れて譯したつもりでも学力の不足は結局覆ふ事が出来ません。又恥をかくと知りながら——我ながらこれはどういふつもりなのかわかりません。たゞあまり御迷惑にならぬ様にとそれのみを思つてをる次第で御座います。

今年のお正月は珍らしく晴天で秋のやうな心地のよい冷たさです。北京はいかゞで御座いませうか。遙かに御健康をお祈りいたします。勿々不備 松枝茂夫拜

周作人先生 一月一日

19400107Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。接讀手書、得悉一一。拙文承蒙譯述斯幸無已、唯意思僻舊難入青年之耳、若在異國讀者愈不易有興趣、深恐勞力多歸、徒然有負雅意耳。見示目錄別無意見可供參考、但其內容如或在讀者無甚興味、似以不用爲宜、如何尙乞尊裁 集名殊不易定、如能選取其中篇名之一作爲集名亦無不可。唯恐難得有合宜者、近幾年所寫文中「結緣豆」尙覺喜歡、又去年冬天又寫一篇「禹跡寺」⁽²⁾亦覺得較爲實在、今揭載在『中和』月刊⁽²⁾、別書送呈一冊乞賜覽。原文未署廿八年十一月十七日、而月刊中乃刪去年月、又將文中之去年今年均改爲前年去年、未免失真矣。勿勿奉復、上

松枝先生 左右

一月七日 周作人啓

19400222Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。前日接誦十三日手書，具悉一一。承雅意擬全譯拙作，聞之且感且愧。鄙人自知能力所限，所寫文章缺點甚多，編集時亦未十分斟酌，往往一集之中有若干篇後來讀之常自慙愧欲刪削之而不可得，今如悉數譯出未免更出醜矣，故願加以裁酌，幸甚甚。近來無話可說，久不作文，但爲青年學生計，關於國文及儒家思想等亦頗欲寫幾篇啓蒙的文字亦尙未能決心執筆也。

見詢數事，附記於後。

一、シ狂言 裏的某一脚色。指狂言柿山伏中之アド，即シ鳥と云ふ物はよう啼く物ぢやが……啼かうぞよシ。公式即謂シ有閑階級應該談風月，要談了罷，シ。

二、實別。紹興方言，意謂シ實にシ。

三、泛潮。即謂シ濕る，潮氣即濕氣也。

又、十杯酒兒。民國前之流行歌，詞云シ一杯酒兒來シ云云，以至十杯，凡十節。

四、虫呵虫呵。原文已記不清，大抵是シ虫や虫、啼いて業ゴウ?つきるのかシ。曾見之於大谷繞石譯ヘルン文中，仿佛虫の文學23 大谷譯註，北星靈板。 中有之，此書現被友人借去，不及查閱，請一查。

匆匆奉答，不盡此上

松枝先生 座右

二月廿二日 周作人啓

19400324Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。承惠賜 尊譯『紅樓夢』第一冊，如此大部，得先生全譯刊之，大是可喜事，想須有十二冊始能完結乎。『兒女英雄傳』以較『紅樓夢』在文藝上的價值當然大要減低，唯鄙人則頗喜之所寫士大夫之理想生活，曲折盡致與一儒說。又運用京話甚圓熟，爲國語文學之佳著。其著者與『紅樓夢』同是旗人，亦是一奇。亞東標點本雖便於讀，點林外史有對立。舊木活字印本有董恂批註，似亦有用。全書頗多外國讀者讀之或不無沉悶處，但書中所映出之中國社會情景如詳述考試情形爲小說中所索。則頗廣大，於了解中國事情上頗有益處，只是亦係大部，譯亦不易耳。偶爾憶及便以附閱。匆匆不盡，此上

松枝先生 座右

三月廿四日 周作人啓

19400423Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。今日收到『中國文學』六十號，得讀大文，且感且愧，又見創元社廣告，知『瓜豆集』等選譯本將出版，即『笑話選』亦由濱君擔任翻譯，更增惶恐矣。前文中說及『野草』內之『風』，其所指之人乃是舍弟建人，幼時喜自製風箏放之，非是鄙人，唯所云折毀云云則是虛構耳。又祖父晚年情性亦是乖僻，前文所推測不盡合於事實。妾本姓潘氏，拙文中因潘安宋玉之聯想，故改爲宋姨太太也。下述一事非此次前文中所有，偶爾憶及，故以奉閱，即是拙文會說『喫烈士』，此喫字爲『喰いものにする』之意，蓋指有人利用紀念烈士等語以謀利者，如發賣貨物以爲名稱商標，辦五卅報，立五卅學校之類是也。關於魯迅之一篇中，似曾說及，或是以供參考，故附書於末。蔡子民先生去

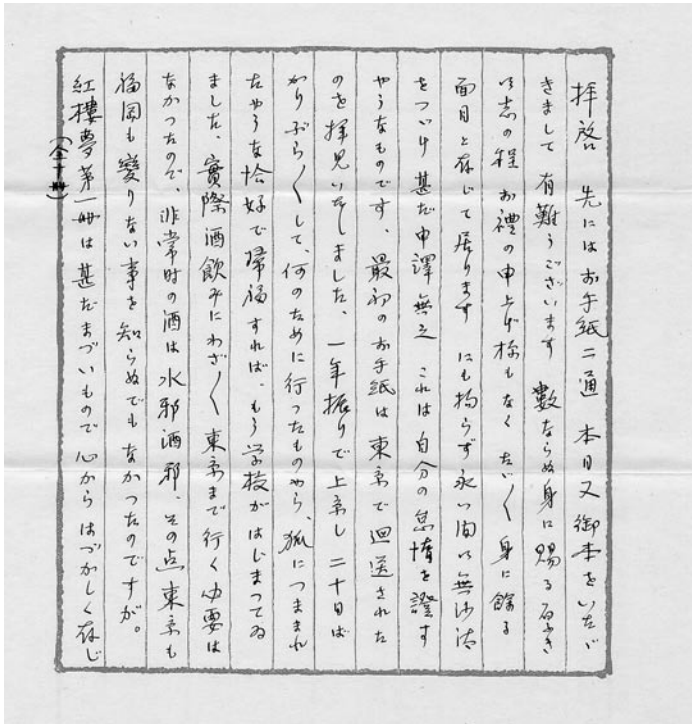
世、有一小文載在『中國文藝』上、想已覽及矣。此上

松枝先生座右 作人啓 四月廿三日

19400520M 【松枝茂夫↓周作人】

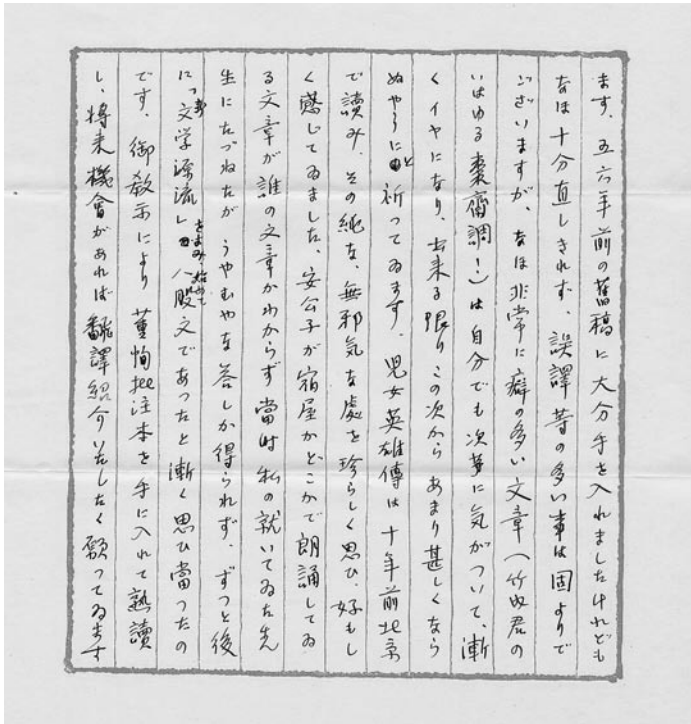
拝啓 先にはお手紙二通、本日又御本をいたゞきまして、有り難うございます。數ならぬ身に賜る厚き御志の程、お禮の申し上げ様もなく、たゞく身に餘る面目と存じて居ります。にも拘わらず永い間御無沙汰をつゞけ、甚だ申譯無之、これは自分の怠惰を證すやうなものです。最初のお手紙は東京で迴送されたのを拝見いたしました。一年振りで上京し二十日はかりぶら／＼して、何のために行つたものやら、狐につままれたやうな恰好で帰福すれば、もう学校がはじまつてゐました。實際酒飲みにわざ／＼東京まで行く必要はなかつたので、非常時の酒は水邪酒邪、その点東京も福岡も變りない事を知らぬでもなかつたのですが、『紅樓夢』（全十冊）第一冊は甚だまづいもので、心からはづかしく存じます。五六年前の舊稿に大分手を入れましたけれども、なほ十分直しきれず、誤譯等の多い事は固よりでございますが、なほ非常に癖の多い文章（竹内君のいはゆる棗齋調！）は自分でも次第に気がついて、漸くイヤになり、出来る限りこの次からあまり甚しくならぬやうにと折つてゐます。『兒女英雄傳』は十年前北京で讀み、その純な、無邪気な處を珍らしく思ひ、好もしく感じてゐました。安公子が宿屋かどこかで朗誦してゐる文章が誰の文章かわからず、當時私の就いてゐた先生にたづねたが、うやむやな答しか得られず、ずっと後に『新文学源流』をよみ、始めて八股文であつたと漸く思ひ當つたのです。御教示により董恂批注本を手に入れて熟讀し、將來機會があれば翻譯紹介いたしたく願つてゐます。

さて又、『中國文學』の拙文、孔があれば這入りたい気持ちでございます。推測の誤つた点は、先生御指摘の一二に



松枝茂夫書簡 19400520M01

止らぬに違ひありません。全體硬く
 なつて、どこからどう書いてよいかわ
 からず、盲目滅法に何も彼も筋道もな
 く書いた形で、殊に方々に「肉麻的」
 文字を弄してゐるのを羞かしく思ひま
 す。随分抹殺しようと思へましたが、
 すでに去年印刷に付されてゐるもの故
 (未出版ながら)、目をつぶつて一切を
 後日に期する事に観念しました。御教
 示の分は早速訂正表にして竹内君宛
 送つておきました。六十二號にのる事
 と思ひます。なほ、『中國文藝』の御
 文は未だ拝見いたさず、東京でその事
 をき、幸い『中國文學』でも蔡先生
 特輯を出さうとしてゐたので早速譯載
 させていたゞくつもりで搜しました
 が、東京にはなく、東京からの帰途、
 京都でも気をつけて搜しましたが又得



松枝茂夫書簡 19400520M02

ず、やむなく「新文學大系總序」の譯文でこれに代へた次第です。

富山房の本は、こんどはいよ／＼本當に出るらしい御座います。譯了から今日まですでに一年幾個月の時日を隔て、その後気づいた誤譯やまづい箇所が澤山あり、今更といふ氣もして氣まづい事はかりでございます。本日いたゞいた『秉燭談』を拝見して、『風雨談』の前にこれを譯させて貰ひたくなりしました。「自画像」自序は恰も先生の『雨天的書』序と東西軌を一にしてゐると申すべきでせう。私は富山房本「解説」の最後に先生と秋骨先生とを併称して「二人のすぐれたモラリスト」とやりましたが、實は勿論皮肉でもなく、そのまゝリベラリストと同義語に受け取られますが、自ら甚だ滑稽

に感じます。「凡人崇拜」の御文を拜讀し、秋骨先生の著作を又々持つてゐる限り取出して拾ひよみました。奥野信太郎氏よりの消息によれば、近々秋骨先生の文集を三巻にまとめて出版の運びになるとか、しかし時節柄、先生の真骨頂を發揮した部分は差し控えねばなると嘆じてゐました。『秉燭談』中の「凡人崇拜」も恐らく譯出するわけには参らぬのではないでせうか。「銀の匙」は私も大へんすきで、多分先生もおすきでいらつしやらうと前から推察してゐました。果たしてさうであつたと知つて愉快です。少し話がちがひますが、濱田廣介氏の「椋鳥の夢」を私は三讀五讀してあかず、子供に讀ませ、友人に送つて讀ませ、頼まれもせぬ提灯持をやつてゐます。こんな本を持つてゐる現代の子供はわれ／＼の時代よりも幸福であると思ひ、誇らしくも思ひます。未明童話といひ、これといひ、又槇山楠郎⁽²³⁾(この人の名は最近はじめて知つたのです)の「猫と誕生日」といひ、若しも自分にさういふ力があれば、支那語に譯して支那の子供に讀ませたい、そんな空想をいつも描くのですが、先生はどう御覽になりますか。

怠惰の為、『瓜豆集』の譯稿はまだ半分しか出来ず、方々不審の個所がございますが、まだまとめてゐません、近々の中に又々御迷惑をかけねばならぬと存じます。

四月十八日『大阪朝日』に『新文学源流』の批評を吉川幸次郎氏が書いてゐる由、本日、北支(山西?) 従軍中の弟からのたよりで知りました。京都で吉川氏に會つた時、書いたといふ話はききましたが、その後新聞に載つたかどうか知らず、支那から之を傳へ聞くと甚だ迂闊な話です。福岡の生活はその程度に浮世を離れてゐて怠けらすによく、ついうか／＼して過ごしてしまひます、

浪人谷いっぱいに咲いてゐたいろ／＼の花も漸く散り、家の前の竹藪でも、裏の雜木山でも、二六時中鳴いてゐたうぐゑすも、いつの間にかジ／＼耳にやかましい蝉の声になつてしまひました。

つまらぬ事ばかり書いてしましました。お許し下さい。

右おわびとお禮をかねて。そろそろ暑くなり初める折柄お身お大切に祈り上げます。 匆々

周作人先生 松枝茂夫 五月二十日

なほ、これはあんまり恥しくて申し上げませんでした。今学校で『陶菴夢憶』をよんでゐます。覚悟はしてゐたがあまりむづかしさに、まるつてゐます。「自序」の一番おしまひの

・「盧生遺表猶思攀榻二三王」とはどういふ意味でせうか。『枕中記』などくりかへし讀んでも合点がまゐりません。

・又「名根」といふのは「名(譽)への執着」といった意味でございませうか。

・閑老子茶「水不生磊」?

・及時雨「不替他謙了也 事事精辦」あの方(五雪叔?)に遠慮しないで、うんと念を入れて作れ、といふ意味?

・「余山盜起」この余山がわかりません。

・陶望齡といふ人は張元汴あたりとどの程度の交渉のある人でせうか。又、陶石梁は本名は何といふのでせうか。望齡の兄弟でせうか。

先生の御本をよんでゐる中、このへんに大へん興味をおぼえて、いろく知りたく願つてゐます。どうか御教示下さいませう。おねがひいたします。

敬具

19400531Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。五月二十日手書拜讀。濱田氏童話昔曾略讀，『棕鳥之夢』則未之見，甚願能得一讀，唯自知文章與少年不相接近，對於童話向不敢著手翻譯也。小川氏著^(童話題)作亦讀少許，但此在十許年前，今亦多不記憶矣。吉川君之批評，曾囑友人代查四月中之『大阪朝日』，終未發見，不知何也。承下問各節，別紙奉呈。

匆匆不盡，此上

松枝先生座右 作人啓

五月卅一日

夢憶自序 〆盧生遺表 二云云，謂盧生在夢中將死，當寫遺表，尙思模仿二王（羲之父子）之書法，求人稱美。名根蓋是佛教語，大意即是〆名への執著〆罷。

陶庵夢憶 北京上海活板本皆多誤植，木板本亦只乾隆時王文誥本稍佳，但不易得。咸豐中廣東伍氏重刻，在粵雅堂叢書中，想各圖書店中多有之。

水生生磊乃是水之生磊之誤。卷三〆禊泉 一則中云，此方鮮磊，即生磊之意，生即不熟。禊泉云。惠泉亦勞而微熟。排印本誤作微熟。 磊即〆閱老子茶 之圭角不動，此蓋是飲茶家之術語，〆素人 們只能領略其大意而已。

〆及時雨 二語，或當讀作不替他謙了，也事事精辦，意云不替他說客氣話，事事皆辦得精美。但此只是望文生義的解說，終覺得不能確當也。張宗子此等書大抵有似江戶時代之佳作，從來研究不^{或可云皆無}充分，參考困難，一讀頗有趣味，若要仔細解釋則難點甚多耳。

刻本、水滸與禱雨有何義味、近余山盜起云云、活板本云有何義味相近、誤。余山當是地名、待考。此或是崙山之省、與塗山通、謂越中之山鄉乎。但此係臆測、想難憑信。

陶望齡與張元濟大抵只是同鄉、有世誼罷？陶近釋家而張則純正儒宗也。陶石梁即石匱（望齡）之胞弟、名爽齡、文集未見、有『小柴桑喃喃錄』二卷、係筆記、語多通達。

19400616M 【松枝茂夫↓周作人⁽³⁰⁾】

拝啓 先日はいろいろと御教示有難うございました。平生句讀をきつてない木板本は讀みなれず、つい活板本ばかりで間に合はせるため、つまらぬ失敗をいたします。学校の粵雅堂叢書本は借出してゐるくせに、活板本を信用して、そちらはろくく見なかったのです。珍本叢書本が樸社本をそっくりそのまま、（誤字まで）襲うたものとは、今まで気づかなかつたとは迂闊でございました。數日前、やうやく『於越三不朽圖贊』⁽³¹⁾を手に入れました。勿論これも活字本ですが、いろいろの事がわかつて嬉しく思ひます。

先日、『椋鳥の夢』と『猫と誕生日』の二冊を郵寄いたしました。自己の好みを強ひるものとお嗤ひでせうか。過般上京中、富山房で貰つた各三冊を、これで残らず散布完了したわけです。

本日手に入れた『大阪朝日』の切抜を同封いたします。勿々不一

周作人先生

松枝茂夫

19400630Z 【周作人↓松枝茂夫】

啓者。手札拜讀、承惠賜童話二冊亦於前日領收、高誼至爲感激。濱田氏作在十年前曾稍涉獵、槇本氏則未讀過、即

此可知讀書之荒疏矣。日來得閑拾讀母の日等數篇，又『掠鳥の夢』亦讀小半，誠如尊言現今有此等書可讀之兒童可謂幸福，文章書物之出生殆亦自有緣法，不可勉強者歟。鄙人讀過雖多佩服處，唯自揣力薄，亦不敢有紹介譯述之想也。近正在梅雨中，天氣鬱陶多陰鬱之感，但因陰雨而得涼爽亦可以說是一得耳。塾居以讀古書爲消遣，了無進益，日前得見橘珉江之『職人部類』(重刊本)，甚爲愛好，可爲近來快心事也。草草，上

松枝先生座右 作人啓

六月三十日

19400713M 【松枝茂夫↓周作人】

拝啓 お手紙まことに有りがたう御座いました。富山房の『文藝隨筆抄』はすでに出版せられました。翻譯したのもう一年半も前の事となつてしまひました。先生のお手許には近くお届け出来る事と存じます。アートの紙缺乏のため巻頭に入れる筈になつてゐたお寫真を入れることが出来なくなり、先生へ差上げる分だけなりとも抜刷で入れたいとの事で、お送りするのが遅れてゐる譯です。あしからず、お含み置き下さる様、願ひ上げます。又、九六頁(『顔氏学記』、一一三頁(『希臘神話』)に一部分を勝手に削除し、それを明記せず(33)に好加減に續けてしまつたのは、甚だ怪しからぬ失札千萬なやり方であつたと、今にして思ひ、申譯なく存じます。これからは必ずその旨を明記する様にいたすつもりですから、どうか枉げてお許しを願ひたうございます。その他方々誤譯やら拙いところが目について羞かしく存じます。

さて長々のびくになつてゐた『瓜豆集』の翻譯、今日になつて漸く一應譯稿が出来上がりましたが。例によつて大抵のところは自己流に故事つけましたが、どうにも故事つけられぬ箇所尚多く、甚だ恐縮で御座いますけれども、

左の條々御教示下さいます様、おねがひいたします。

(瓜豆集題記)

○「能與集」

(関于雷公)

○七頁四行

「冥報の説は大抵彼等の言ふが如くそれによつて王法の及ばず、政治の腐敗せるを補ふもので、淫を福し、善を禍したのは、生前死後に之を彌縫する、これがその一である。」かう訳して宜しいでせうか。以補がどこまでか、るか、乃がどれだけを承けるかハッキリわからぬのです。

(談鬼論)

○二六頁七行、見其鬼香灰色則平安無事

(家之上下四旁)

○三十頁、國大選挙

阿毛師父

○三十一頁、木華作「海賦」

(劉香女)

○四十三頁、末行、外國銅匠ハ外國人(向き?) 經營の店の意?

○五十頁五行、而天下之貧者以力相尚者不才者皆不得娶。

(尾久鬼怒川事件)

○五六頁、南非、須萊納耳著「婦女與勞動」

(鬼怒川事件)

○七十一頁、福勒耳、凡佛耳台、契耳尼舍夫斯奇、

(北平的好壞)

○百一十一頁、「白雲風」

○百十三頁、租看的紅紙戲目

(常言道)

○百四二頁六行、賽過揆迷露做餅

○百四三頁九行、化僧飽煖思行浴、印詭飢寒起道心

十行、覺得忍俊不禁，——こそばゆい？

(常談叢錄之二)

○一五六頁二行、又出古舞屣賤服，女賤則男賤。

○一五八頁四行、而爲紙胎灰漆碟

○一五九頁三行、火照漁蛙者寥寥，火で照らして蛙を漁る者？

(藤花亭鏡譜)

○一六二頁末四行、云偕夢樓太守文治，偕は姓？共ニ？

○一六七頁四行、圖難免走様罷。型にハマル？模様化する？

〃 五行、打本上石。 拓本？

(關於試帖)

○一七二頁三行、而江都平津太子家令並起而應之。

〃 七行，今日爲試文，亦日爲八比，而試問八比之所自試……

(關於尺牘)

○一七八頁末行、四先生共蹤浮名，互觀無始，臭味千古，往還一時，

○一七九頁一行、又恐林汝寧之疑其爲再尋己也

○一八九頁四行、餘則囊之耳枕

(談養鳥)

○二五七頁三行、而花鳥得予亦所稱一人知己死可無恨者乎

○二五八頁五行、不過如人生同此居第^{クダ}少有廣狹之殊耳。

○二五九頁六行、尤爲不成氣候

(再論萬民傘)

○二六六頁六行、越中傳說太守被剥皮植草

七行、朱棣順、永樂帝？

○二六七頁一行、新墾吃西瓜的笑話

(關於諺庵悔謔)

○二八四頁四行、而書既國門，逢人道悔，

〇二八七頁末三行、若呂豫石一臉舊選君氣、

末二行、李玄素兩襪搖斷玉魚、

是其本等、

19400716M 【松枝茂夫↓周作人】

拝啓 別便にて『文藝隨筆抄』一部御手元迄御送付いたしました。實ハ己に廿日以上も前に出版されたのですが、前便に申し上げました様な譯で、スローモーションの富山房未だに送ってくれて居ない様子ですから、不取敢小生から一本をお目に懸ける事にいたしました次第で御座います。二三著しい誤譯と氣づいたのは訂正してみました、尚自ら氣付かぬ處はどんなに多いことと恐れます。又自分の向ふ不見の大胆さに驚きます。さぞかし滑稽に思はれる事と存じます。或いは又誤り傳ふる事の多きを御腹立もやと推測られ恐懼いたして居る次第で御座います。何卒忌憚なき御教示を得て、何日かはより完全な物にしたいものと心から願つて居ります。何卒々々御願ひいたします。炎暑の砌御大事に祈上げます。 勿々不一

七月十六日 松枝茂夫拜

周作人先生

19400720Z 【周作人↓松枝茂夫】

題記「能與集」、清末流行之一種八股文讀本。

關於雷公 七頁四行、以補王法之不及、（在社會上）蓋 政治腐敗、福淫禍善、（乃）故 以生前（曾作惡）死後（或是）當受罪（之說）

彌縫之，云云。

談鬼論 二六至七行，其鬼〔若是〕ハイレイロ香灰色。

家之上下四房 三十頁，國〔民〕寫文時正舉行此大會大〔會〕選舉。

又，阿毛師父，師父是和尙之尊稱，阿毛則則俗名，此僧生活與俗人無異，人亦忘其法號而以俗名稱之，此人實有。

三十一頁，木華，人名，「海賦」見『文選』中。

劉香女 四十三頁，外國銅匠外國式之銅匠，大概實乃機器匠耳。

五十頁五行，以力相尙者依恃暴力者。

尾久事件 五六頁，須葉納耳，Olive schreiner。³⁴

鬼怒川事件 七一頁，福勒耳 August Forel，凡佛耳 Th. Van de Velde，³⁵契耳尼舍夫斯基 Nikolai Tcherny-

shevski。

北平的好壞 百一十一頁，白雲風シラ雲。

百十三頁，清未入戲園看戲，有人以紅紙上寫當日之戲目分給觀者，不久復來收去，分給別人，還付時給以數文錢，故稱之曰租看。

常言道 一四二頁，迷露，吳語，不知何意。賽過亦吳語，原意云勝於，或可比。

一四三頁，化僧，印詭，二者均是書中人名，用意不明，飽暖思行浴飽暖思行浴，飢寒起道心飢寒起道心，本有此二句俗語，此處是モチリ也。

忍俊不禁，普通解作「忍不住要笑」。

常談叢錄二 一五六頁，又出〔於〕古舞屨〔此舞屨乃是 賤服，女〔既〕賤則男〔亦〕賤。

一五八頁，紙胎灰漆磔，以紙爲胎，〔紙胎〕骨灰和漆厚塗，上再塗漆而成之皿。

一五九頁，火照漁蛙火テ照シテ蛙ヲ漁ル。

藤花亭鏡譜 一六二頁，偕〔王〕夢樓太守文治，偕〓共二。王文治，號夢樓。

一六七頁四行，走樣〓樣子ガカハル，不同 原本一樣。

又五行，打本上石，打本〓拓本，上石意云石印二付ス。

關於試帖 一七二頁，江都董仲舒ノ事，因其曾爲江都相也 平津公孫弘，封爲平津侯，太子家令漢代官名，此處不知所指何人

又，八股之所自始，試字誤。

關於尺牘 一七八頁，共二〔敝〕蹠 屣ノ様ニ棄テル 浮名ヲ，互ニ觀ル，無始ノ指佛敎，臭味千古，往還スル，一

時二 意云同時。

一七九頁，疑其爲再〔來〕尋己也。〔林〕

一八九頁，耳枕，小枕，用以墊耳下者。用白菊花作枕，云可以明目。

談養鳥 二五七頁，所稱一人知己原本如此，或曰所謂

二五八頁，同此居第スマヒ

二五九頁，不成氣候，大抵如云モノニナラヌ。

再論萬民傘 二六六頁，剝〔其〕皮，植〔以〕草，謂剝去人皮，其中以草填充之，如剝制動物標本也。

又，朱棣今尙有錢永樂帝，張獻忠曰大順通寶稱帝，年號曰大順，稱之，有如朝代，其實獻忠自稱朝代爲〓大

西〓也。

二六七頁，新增吃西瓜係猥褻的笑話，不記得見於何書，但據口傳大意如下：

里返りの新夫婦が午寝から起きると、西瓜が出た。婿が手を出せば嫁は驚いて云う。噯！婿は噯と手を引込む。妹は唔？と聞く。お袋は哦！オハ。俗傳房事之後男子如食冷物則立死也。ドレ意

關於悔謔 二八四頁，書既〔懸諸〕國門，謂既出版，公之於世，原語似係呂氏春秋之出典。

二八七頁，選君似即選人，後來所謂候補官吏，即等候任命之官吏也。

襪即是襦ヌ，官吏傲慢作態，則行走時搖擺，兩裾皆動，古時官腰下挂金魚玉魚，故至搖斷。

又，本等ニ本色，謂與其身分相應之事。

手書拜讀，寫此數紙分量已重，先行發出，日內容再寫信。匆匆即上

松枝先生座右 作人啓 二十日

19400729Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。前接奉手書，併惠贈尊譯拙作隨筆抄一冊領收，拜謝。拙文本無足取，又想目下唱聲雖高，社會上對於現代支那之思想文藝實乃無甚興味，或購讀者不見多，有負高譯，至於出版者之利損尚在其次耳。聞京都友人言，創元所出叢書銷售不多，因聯想及之附及以發一笑。日前方紀生君見訪，為攝一影，茲寄呈一枚乞賜察收。方君技術頗佳，唯片中形貌大有古本屋主人之概，亦可嘆也。匆匆不盡，此上

松枝先生座右



写真裏書：廿九年七月廿一日在北平作人

七月廿九日 作人啓

19400816M 【松枝茂夫↓周作人】

拝啓 過日は小生の厄介千萬な質問に對して一々御懇篤なる御教示を賜り、有難うございました。又御寫真を有難う御座います。厚く御禮申上げます。益々御元氣の御様子を拝し、心から嬉しく存じます。古本屋の主人どころか、あまりにも立派すぎる御姿で私のやうな者が若しもお會ひしたら、或ハ返事もろくく出来ないのでないかと思ひました。本當にさう思ひます。何れにしても有難く感謝に堪えません。

『瓜豆集』はお蔭様で昨日譯者の分の校正を了へました。校正の際になつて、又々疑問百出して、頗る周章狼狽いたしました。何とも胡麻化し様のないものが幾つも出来て、又々一冊の迷譯書を捏ち上げる仕儀となつてしまひました事を恐縮に存じます。先生に対しても本當に御詫びのし様も御座いませぬ。富山房の本は一般にむづかしすぎると云ふ批評をききました。『瓜豆集』でも自分でそれを氣づかぬでは無かつたのですけれども、十分に直すひまが御座いませぬでした。この次からは何とか一工夫せねばなるまいと考へて居ります。東成社の『隨筆集』が十五日に出来るとの由で御座いますから、御手許へ一本を差上げる様、本屋へ通じておきました。近々の中に著く事と存じます。内、「結縁豆」中の例の俳句は勿々の中に檢出を怠り、甚だ可笑しなものになつてしまひました。⁽³⁷⁾ こんど圖書館へ行つて檢べて見ましたところ、「虫よ虫ないて因果が盡きるなら」となつてゐましたので、愕然としたのです。これもお詫び申上げねばなりません。東成社の次の配本は『文藝論集』ださうで、小生は「人の文學」一篇を本日送りました。これは編輯者の指定に依るものです。尤も小生の訳文は數年前から出来てゐたのですが、

蕪雜きはまる譯文でこんな風に無闇矢鱈に翻譯されてはたまらんと迷惑がってお出でせうか。或ハ亂譯者の米櫃と化して了つたと苦笑なさつておいででせうか。いづれにしても慚愧に堪えない事です。

當地は此間まで雨が多く、涼しい日が續きましたが、最近になつて又暑さがぶり返して来ました。今年の夏はとうとう海水浴にも一度しか行かずにはや半分以上を過してしまひました。

御地は如何でせうか。素晴らしい北京の秋も漸く近く、さぞかし待たるゝ事と存じます。

以上御礼旁々つまらぬ事ばかり書きなぐりました。

何卒御許し下さい。 勿々

周作人先生

松枝茂夫

八月十六日

全く見苦しい筆の跡お晒ひ下さい。毛筆は手にする事は一年に數える位しか御座いませぬ。

19400915Z 【周作人→松枝茂夫】

啓者。前奉手書、遷延未答。秋間照例患枯草熱、以二至十日前後爲最甚、雖本來懶居、但因此更懶於作事矣。近日風雨之後天氣漸涼、不久將成冬天氣候、想博多灣頭當尙溫暖也。承惠贈隨筆集、謝謝。在此刻緊張時代尙有讀此等不急之文章、殆亦難得矣。懷東京文中有一處因原文欠明瞭、故易致誤解、即九十一頁十一行以下、大意應云「今日北平の街を歩いて毎日^{〔確足の女を見る事〕}經驗する如く、思はず愀然樂まなかつた事のないのは」、即謂不見纏足者故無不樂之事也。近日頗想翻閱坂本四方太之『夢の如し』、此意蓄之已甚久、唯至今尙無此決心、中國語中稱謂^{如清チヤン}缺乏、實其困難之一也。匆匆即上

松枝先生台鑒 作人白

九月十五日

19400924M 【松枝茂夫↓周作人】

拝啓 先日はお手紙をまことに有難く存じました。御病気はその後いかがで御座いますか。漸く寒さに向ふ折柄、折角御大事に御養生のほごいります。

降而 小生はお蔭様にて頑健、この二日休には九重山に登り、高原美を満喫して昨夜おそく帰福いたしました。帰つてみたら、創元社から『瓜豆集』の譯本、出来て送つて来てをりました。とりあへず一部だけお送りいたします。別に本屋の方からも直接送るやう、申しやつておきます。

相変らず、まちがひだらけな翻譯で、赤面の外は御座いません。好い加減な當て推量の解釋がずるぶん多く、偶然あたればそれまでですが、五五頁の林琴南の註のやうに早吞込がはづれると目もあてられませぬ。自分で気づかぬこの類のものは外に多々あらうと存じます。「懷東京」の御教示の個処、どうもをかしいとは思ひながら、こんどもそのまゝ、見過し、残念で御座います。又の機會に訂正いたしたく存じます。お気づきの事、教示願へればと存じます。

右にとりあへず要用まで。くれぐれもおからだ御大事になされます様、いのりつつ 匆々

九月廿四日 松枝茂夫

周作人先生

19401001Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。手示誦悉。承賜尊譯『瓜豆集』一冊亦已領收，謝謝。篇末之文屢蒙介紹於貴邦，且感且愧，今承整冊譯出，尤深此感。其實此中亦無幾篇可讀，「尾久」「鬼怒川」二文稍稍用心，而國內青年均未能解，時以為憾，意見本極平庸，實亦不過野人獻芹之意耳。讀過偶有見到，附列於左以供尊考。

四七頁 由你說，即由你分說，云訳方出来ル。

六四 蹩脚的廣播收音器，下手、粗末。此處作如是解。

(欄外に記入：蹩脚的官話，即下手之意)

一四三 蔡谷清，名元康，元培之從弟，留學日本明治大學，為浙江中國銀行行長，已卒。

二九〇 冷血，姓陳，忘其名，前時報主筆。

三四七 友人，即是胡適。

松枝先生座右 作人啓 十月一日

19401029Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。手書誦悉，承下問各節別紙寫呈。三外野人記得是鄭所南之別號，唯何謂三外則因手邊無『心史』，未及查也。張宗子所云『瑯嬛福地』，如據『夢憶序』卷八所言，乃其所自題之名，本無其地。關於『項里等里』，如查『紹興府志』當可更詳，惜今亦不及借查耳。草草奉復，即上

松枝先生大鑒 作人啓

十月廿九日

祁氏兄弟 一、麟佳 二、鳳佳 德公

三、早卒，名不詳 四、駿佳 季超

⑤、彖佳 止祥 六、彪佳 世培

⑦、熊佳 文載 八、象佳 翁艾

以上之五與七爲祁承勳子，餘均承熾（承勳之兄）子也。

項里山 近人編刊『紹興地志述略』云，在城西南二十里，山下地名項里，昔項梁與籍項聖居此古剎客要離異。葬於此云云。

九里山 在南門外，大約與射的山（在城南十五里）相去不遠罷。

三外野人『心史』南宋遺民著者鄭思肖之別號。

19401121Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。繪葉書拜覽，知曾作慶州之游，甚可羨慕，老岐沖之汽船未乘尤爲可喜，此當可云有天佑也。北京天氣已甚寒，雖家居可靠爐火亦無事可作，偶取舊有歐洲小說讀之，殊有趣味，或想明年再來動手翻譯一二亦尙未能定，但坂本文泉子之『夢の如し』明治四十二年刊常在案頭，須先譯耳。匆匆。

松枝先生左右 作人啓

十一月廿一日

19401205Z 【周作人→松枝茂夫】

啓者。前承賜尊譯『紅樓夢』第二冊已領收，匆匆未致謝爲歉。見『東亞解放』本月號中有魚住君一文，對於貴邦譯譯華文書多致譏諷，若此鉅著或可以免。唯念及拙作亦蒙採及，雖點鍊成金與有光輝，但恐終不免貽譏諷者，且累及譯主，思之不勝惶惶耳。草草即上

松枝先生左右 作人啓

十二月五日

注(1) 文中日付がないが、封筒の消印及び内容から一九三七年十一月五日投函のものと判断した。

(2) 本年七月の盧溝橋事件を契機に、日本軍は北京に入城し完全制圧した。これに伴い、十一月には北京大学の教職員は長沙へ避難、国立臨時大学を開校したが、周作人ら四名だけは留守を預かるといふ名目で北平（北京）に残留した。この間の事情を当時の日本でもどこまで把握できたかは定かでない。

(3) 尤炳圻（一九二〇―一九八四年）は、一九三二年清華大学外国語文系に入學、イギリス文学を学ぶ。一九三四年（昭和九年）卒業後は、東京帝国大学に留學、イギリス文学及び日本文学を学ぶ。のちに盧溝橋事件に際して、三十七年七月に帰国。松枝の述べる「御帰国」とはこの事を指す。帰国後は北京師範大学および北京大学、解放後は西北師範学院（現西北師範大学）にて教鞭を執った。『一個日本人的中國觀』（一九三五年上海開明書店、原著・内山完造『生ける支那の姿』（一九三五年）や夏目漱石の翻訳で知られる。尤炳圻の経歴については、「尤炳圻生平及其著譯」（王培青『魯迅研究月刊』一九九六年第七期）に詳しい。淪陷期の北京においては、周作人門下の文人として、最後まで行動を共にし、日本敗戦後南京国民党政府のもと、入獄した周作人が出獄する際も身辺の世話をしている。この間の事情は、木山英雄『周作人対日協力の顛末』（岩波書店二〇〇四年刊）に詳しい。

(4) 『文藝』五卷十一号（一九三七年、改造社）に「二つの礼讃」と題して掲載された。改造社版単行本では「三礼讃」に改められている。

(5) 『中国文学月報』二九号（一九三七年八月、中国文学研究会）掲載「周作人著訳目録」（松枝茂夫、松井秀吉編）を指す。

(6) この年、北京大学が南遷すると、北京に残った周作人は翻訳で生活を維持しようと考え、中華教育文化基金理事会から稿料を受けつつギリシャ神話の翻訳に取り組んだ。このことを指すものと思われる。

(7) ユーベルとは『探偵ユーベル』（ヴィクトルユーゴー作、森田思軒訳、民友社一八八九年）のことを指す。林訳小説の中には見あたらず、

漢訳は不詳。

- (8) 林沢小説の一種『黒太子南征録』（英國柯南達利、林紓、魏易合譯、一九〇九年）。周作人の説明にあるハガード、続く書信に見えるスコットも誤り。『仙女縁』という書名は存在せず、書名から類推すると、おそらく『荒唐言』（伊門斯賓塞爾、林紓、會宗章合譯、一九一四年再版）が該当すると思われる。同書の原題は、Faeie queene 邦訳題『妖精の女王』であり、内容的に最も近い。あるいは題名として近い『金樓神女再生縁』（英國哈葛德著、林紓、陳家麟合譯、一九二〇年）か。このほか回答で言及していない『白雲瑛』も未詳。
- (9) 「周作人著訳目録」を共に編んだ松井秀吉のこと。『周作人隨筆集』（改造社）の「訳者あとがき」（一九三八年六月）によれば三十七年十一月二三日に大連で「不慮の難」で客死したという。
- (10) 田中乾郎は、松枝茂夫と親交のあった田中慶太郎（一八八〇〜一九五二）の子。一九五三年病歿。『東京都立日比谷図書館蔵特別買上文庫目録・諸家漢籍』所収跋文（長澤規矩也）による。
- (11) 一九三八年の八月頃、尤炳圻が東京に赴き、松枝茂夫とも面談し、周作人あてに贈り物を託したことは19380831Zからも伺われるが、訪日目的は未詳。竹内好「北京日記」（『竹内好全集』第十五巻・日記（上））によれば、「書物を取りに東京へ行く」（八月五日の項）ため八月中に三週間ほど日本を訪れた模様である。
- (12) 山本実彦『支那事変・北支の巻』（改造社一九三七年刊）所収「周作人の心境」では、周作人が沈從文を苗族だと断定したかのように記述している。
- (13) 平白とは尤炳圻のペンネーム（談土撥鼠で尤炳圻を「平白」と呼んでいる）である。従って、この手紙は尤炳圻を経由して松枝茂夫に届けられたと思われる。封筒は既に散逸し、手紙の日時を推定する手がかりは文中の「廿七日」のみだが、手紙文中の梁啓超「論小説與群治之關係」とは、「關於魯迅（其二）」で周作人が言及するものを指す。この作品を松枝は『周作人隨筆集』（改造社）『瓜豆集』（創元社）の二冊に収録している。改造社版では文中指摘するとおり「群治」に「デモクラシー」とルビを打つてあるのに対し、創元社版では周作人の意見を踏まえて「群治（社会生活）」に改めた。従って、改造社版を周作人宛に惠贈した時期（19380711Z）の後と考えられる。
- (14) 田中乾郎のことを指す。
- (15) 時期的に見て「周作人文藝隨筆抄」（富山房百科文庫）と思われる。
- (16) 「教材」として編まれた『周作人隨筆抄』（文求堂）と思われる。
- (17) この「別紙」は欠落している。
- (18) この箇所は「關於雷公」（『瓜豆集』所収）の一節。
- (19) 縣名。現天津市宝坻区。
- (20) 「禹跡寺」は「天陸」四巻五号（一九四一年五月号）に訳載された。
- (21) 『中和月刊』（第一巻一期、一九四〇年一月号）、後に『粟味集』所収。
- (22) 後半の質問への回答を見る限りでは、「結縁豆」に関するものであるから『瓜豆集』の全訳を申し出たものかと考えられるが、実際には一部省かれた作品がある。「訳者は初め本書の全訳をなすつもりであったが、途中又考えがかり、都合により四篇だけ省略することにした」（同

書「訳者の言葉」と説明している。

(23) 『虫の文学』(Atcadio Hearn 著・大谷正信 訳註、北星堂書店一九二一年三月刊、『小泉八雲文集』第四編)。大谷(一八七五—一九三三年)は東京帝国大学時代に小泉八雲に学んだ学生。英文学者として教壇に立つ一方、正岡子規に師事した俳人としても知られ、繞石と号した。周作人には俳人としての大谷も意識されていたため、大谷繞石と記したのであろう。

(24) 松枝茂夫「周作人——伝記的素描」(『中国文学』第六〇号、一九四〇年四月号)を指す。

(25) 「濱君」とは濱一衛(一九〇九年—)を指す。当時、創元支那叢書より『苦茶庵笑話選』の刊行が予定されていた。『瓜豆集』の巻末に続刊予定広告がある(飯倉先生ご教示)。

(26) 「蔡子民先生事」(『中国文藝』第二卷二号、一九四〇年四月号)『葉味集』所収。

(27) 「補記」(『中国文学』第六二号、一九四〇年六月号)を指す。

(28) 正しくは榎本楠郎(一八九八年—一九五六年)。プロレタリア児童作家として知られ、晩年には「かがし」(葉紹鈞)の翻訳を手がけている。

(29) 吉川幸次郎「中国新文学源流」(『大阪朝日新聞』一九四〇年四月十八日付)のこと。

(30) 日付は封筒裏書きによる。

(31) 張岱『三不朽圖贊』を指す。

(32) 橋畊江は正しくは、橋畊江。

(33) 「顔氏学記」では、原文にある「如現時日本之外則不惜與世界爲敵、欲吞噬亞東、内則敢於破壞國法、欲用暴烈手段建立法西派政權、豈非悉由於此類右傾思想之作祟歟。内田等人明言即全國化爲焦土亦所不惜」の部分が「全国を焦土と化するも惜しまざる所など」と、日本の中国侵略の意図、内田(内田信也(一八八〇—一九七二)と思われる)への言及を全て省いて訳されている。また、「希臘神話」では、ハリソン(Jane Ellen Harrison)の『學子生活の回憶』(Reminiscences of a student's life)からの引用文中、当時の日本皇太子(昭和天皇)の様子を紹介する箇所を全て省いて訳している。「未だ記述了一件很有趣的事……我後來在紐能學院所遇見的最末的一位名人即是日本的皇太子。假如你必須對了一個夠做你的孫子的那樣年青人行敬禮、那麼這至少可以使你得點安慰、你如知道他自已相信是神。正是這個使我覺得很有趣。我看那皇太子非常地有意思。他是很安詳、有一種平靜安定之氣、真是有點近於神聖。日本文是還保存著硬伊字音的少見的言語之一種。所有印度歐羅巴語裏都已失掉這個音、除俄羅斯文外、雖然有一個俄國人告訴我、他曾聽見一個倫敦實報的叫比卡迭利(Dicadine)的第三音正是如此。那皇太子的禦名承他說給我聽有兩三次、但是、可惜、我終於把它忘記了。所謂日本的硬伊字音不知道是怎麼一回事、假如這是俄文真好像是或亞拉伯數字六十一那樣的字、則日本也似乎沒有了、因爲我們知道日本學俄文的朋友讀到這音也十分苦鬥呻——或者這所說乃是朝鮮語之傳訛乎。」

(34) オリーヴ・シュライナー(一八五五—一九二〇)のこと。

(35) それぞれフォーレル(August Forel)(一八四八—一九三二)、T.H.ヴァン・デア・ヴェルデ(Velde, Theodor H. van de' 一八七三—一九三七)。この二者はいずれもセクソロジー研究の先駆者。周作人が目撃した可能性のある邦訳書としては『性慾研究』(August Forel 著; 大

日本文明協会編輯、大日本文明協会事務所一九一五年）、『夫婦に於ける嫌悪性…完全なる夫婦・第二部』（ウン・デ・ヴェルデ著…平野馨、有山浩夫共訳、平野書房一九三五年）がある。

(36) チェルヌイシエフスキー (Chernyshevsky, Nikolay Gavrilovich) (一八二八—一八八九) のこと。ロシア帝政下の反体制知識人。周作人が目撃した可能性のある邦訳書としては、『何を為すべきか』（チェルヌイシエフスキー作、神近市子訳、南北書院一九三一年）がある。

(37) 『現代支那文学全集・随筆集』（東成社一九四〇年）所収の「結縁豆」では「虫よ虫よ鳴いたら業が盡きるかや」と訳されている。

(38) 『東亞解放』には、魚住という人物の文は見あたらない。恐らく魚返善雄「新しき支那盲拜」『東亞解放』第二卷十一号、一九四〇年十一月）を指すものと思われる。魚返はコラム風の短文を次の一節でしめくくっている。「私の知ってゐることは、現在の日本に続々と翻譯紹介されてゐる支那人の著作が大抵は例の「中國」時代の出版物であり、文化の各方面、例へば文學や語學において、一部の日本人が新奇と銜つてゐる事柄が實は事變以前の「蒋介石氏」の政策そのままであるといふことだ！」